



春秋戦国の兵家たち (変化と客観的な判断の強調)

4月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2022年4月21日(木)

孫子をはじめ兵家は、第一に客観的な判断を強調する。

ロシアのウクライナ進攻は、「孫子の兵法」の中にある。

孫子の兵法第一の「始計」において、「兵は国の大事にして、死生、存亡の道なり。」と言う。安全のためには国家の実力を養成しなければならないということである。

弱いところは攻撃を受ける恐れがある。

英語でも「Weakness provokes」(弱さは戦争を誘発する)と、する。

ロシアの進攻は良くないが、それを煽る米国、NATO、ウクライナの対応も良くない。

「呉子」は、「孫子」と併称される「呉起」の言葉を集めた兵書である。

呉起は最初、「魏の文侯」に仕え、その治績は大いに上がったが、文侯の死後、魏を出て楚の宰相となった。

呉起は、「楚の悼王」の知遇にこたえ、東に越をうち、北は陳、蔡の二国を併呑し、更に趙、魏、韓を撃退し、西の強国秦をも攻撃し、連戦連勝した。

また、内政面では、封建制度から郡県制度へ移行してゆく時代に応じ、強力に楚の中央集権化と新しい統一を進めた。

「尉繚子」は人間本位の兵法書である。

秦の始皇帝に仕えた尉繚の説を集録したものである。

秦が天下を統一する16年前に、始皇帝に諸国の対秦同盟を未然に防ぐ策を説き、好遇を受けた。しかし、始皇帝の人品を見て去ろうとした。だが、引き留められて秦の軍事官に登用された。

彼は、戦争は悪であり、人間にとって好ましくないものであるという基本的な考え方に立つ。しかし、大義名分が誰の目にもあきらかな場合、つまり正義の戦争は、先制攻撃をかけても差支えないとする。

「六韜」は周の建国(紀元前12世紀)に功績のあった太公望の説いた兵法と言われている。

「韜」とは、深くしまいこむという意味で、転じて「秘訣」である。

「六韜」は、六つの秘訣であり、「文韜」「武韜」、「龍韜」「虎韜」、「豹韜」「犬韜」で構成される。

日本の「虎の巻」という言葉はこの中の「虎韜」から来ている。

参考：史記(孫子、呉起列伝、始皇本紀)、司馬遷史記(徳間書店)